

「いのちの山河」再上映会 盛大に行われる

10月の完成上映会に続く2回目の上映会が12月13日 銀河ホールで行われました。午後の部では西和賀町支援会議会長の細井洋行町長が挨拶に立ちました。新宿にある武蔵野館で上映中の「いのちの山河」が好評につき1月8日まで延長された事、びのびの満足度ランキング1位だった事を話しました。そして、最後にこの映画から町の将来を含め多くの事を学ぶ事が出来ると思います。と結びました。

続いて上映運動を成功させる右手の会 副代表 遠藤寿美子氏が聞き手となり長谷川初範さんをお迎えしてのトークショーが行われました。

長谷川初範さんトークショー



謹賀新年

新春を寿ぎ謹んで

お慶びを申し上げます

今年も「深澤晟雄の会」に、皆様の温かいご支援とご指導をお願い申し上げます。

平成二十二年 元旦

特定非営利活動法人

深澤晟雄の会理事長 太田 祖電

他役員・事務局一同

「いのちの山河」上映案内

- 1.7 大津市民会館
- 1.9 矢巾田園ホール
玉村町文化センター
札幌エルプラザ3F ホール
- 1.10 藤枝市生涯学習センターホール
- 1.16 松戸市民会館
- 1.17 伊勢崎市民文化会館
- 1.22 摂津市民文化会館
松江市民活動センター交流ホール
～ 1.23
- 1.23 キャラホール
宮古市・みやこシネマリン
～ 1.29
大東市総合文化センターサティホール
唐津市文化体育館ホール
- 1.24 八幡平市西根地区市民センター

初範さんは、昨年2月クランクインで豪雪の夜間学校のシーンが雨続きで雪が降らず秋田からトラックで雪を運ぶ話も出た事。

埼玉からバスでエキストラの方々 came だったので撮影の前の晩、旅館に行つて挨拶をする際に寒いから下にスバツバ2枚と靴下2枚をはいて撮影に臨んで話をしてら、その方達に笑われた事。

学校で習っただけで生きて行つていいのだろうかと思ひ映画の道に入った事。

そして、映画については「生懸命創りました。生きていた人達と魂を吹き込んで創らせてもらいました。地域、国を元気にさせられないかと思う。笑い、泣いて、楽しんでもらいたい。」と結びました。

深澤晟雄村政時代

今年の1月から深澤晟雄村政時代を、共に歩まれた太田祖電氏の書かれた原稿から綴っていくしたいと思います。記念する第1回は、沢内に戻って来るころから始めます。 共済新報から抜粋)

村づくりの胎動

深澤晟雄氏は昭和29年6月に帰村しましたが、その1週間後の7月1日に父上が2度目の脳溢血で亡くなりました。晟雄氏は、すぐ定時制沢内分校で教鞭をとりましたが、やがて村からの強い要請で空席となっていた教育長を引き受けることになりました。教育長になったその時から、彼の村づくり活動が積極的に始まって行きます。

第一には、村づくりをするためには組織づくりをしなければならぬ。そして、皆の意見を聞いてどこに問題があり、どうすれば解決がしるかということをし、徹底的に話し合う必要がある。

また、婦人がばらばらであること何ら意欲がないようでは村づくりはできない。婦人の組織づくりをしように決意しました。こうして地域毎に婦人会を作るために毎晩のように自転車に乗って各集落に泊まりがけで出かけて行くのは、婦人達と話合いました。ついに、昭和29年の秋には、15の地域婦人会が誕生し更に、沢内村婦人連絡協議会が結成されました。

この婦人会が推進力となり、自分達で自分達のいのちと健康を守る村」の組織的な活動の母体となっていくのだ。

昭和30年深澤教育長は「広報さわうち」を発刊し、自ら編集人となり、水を得た魚の如く社会教育重視の活動を展開し始めました。その創刊号には「広報のつぶ声によせて」という深澤教育長の次の一文があります。

「広報活動を伴わない民主主義なんて目鼻のない人間のようなもので、奇怪な化物の類である。村広報はいうまでもなく、村政の実情をそのままに村民に知らせることを任務とする。この任務を果たすためには、次の諸点に注意しなければならぬ。

第一点は広報の客観性である。政治的に無色であり、思想的に無臭であり、いささかも主観に よって歪められた広報であってはならない。

第二点は広報の民主制である。広報は決して上司一任のものであってはならない。関係者の陣容も、官民を問わず、有能適格の方々による公平と妥協を期するものでなければならぬ。

第三点は広報の庶民性である。広報は官報式の庶民性を重視し、親しまれる広報を意図すべきである。「このように深澤氏の意図は明確に下からの村づくりであります。そのための力、自治の力を作り出して行くことにあります。一見無気力で、自主性に乏しいように見える村びと達にも、強く人間らしく生きたいという欲求があり、それを掘り起こして、村びと自らの組織づくりをすることが必要であり、そのためには、強力な社会教育の展開が、すべての言動力となるものであることについては信念をもちました。

お客様との出会いから

語らいは今でも……

着物姿で現れたその方は三重県から来られました。新聞の片隅に本当に見過ぎたので、まいそな小記事「いのちの山河」上映を知らせる内容、執るものもとあえず観にいかれたそうです。そんな思いに駆られたのは今から30年前、当時沢内病院の副院長であった吉本先生が奈良県の山添村の診療所に移られた時、そのお客様も居られてよく沢内村の話をしてくださったそうです。昨日の事のように思い出されるのと事。それから30年間お会いする機会がなく「吉本先生はこの映画の事を御存じでしょうか。」と聞かれましたので「今でも心に沢内村の事が入っていれば小さな記事を見つけていると思います。」と答えました。先生は山添村の診療所を昨年の3月に定年で退職されたそうです。岩手に親族が住んでいらっやいますのでよく見えられるようです。人との出会いは不思議、このような出会いがなければ私は、このお客様にお会いする事が出来ませんでした。